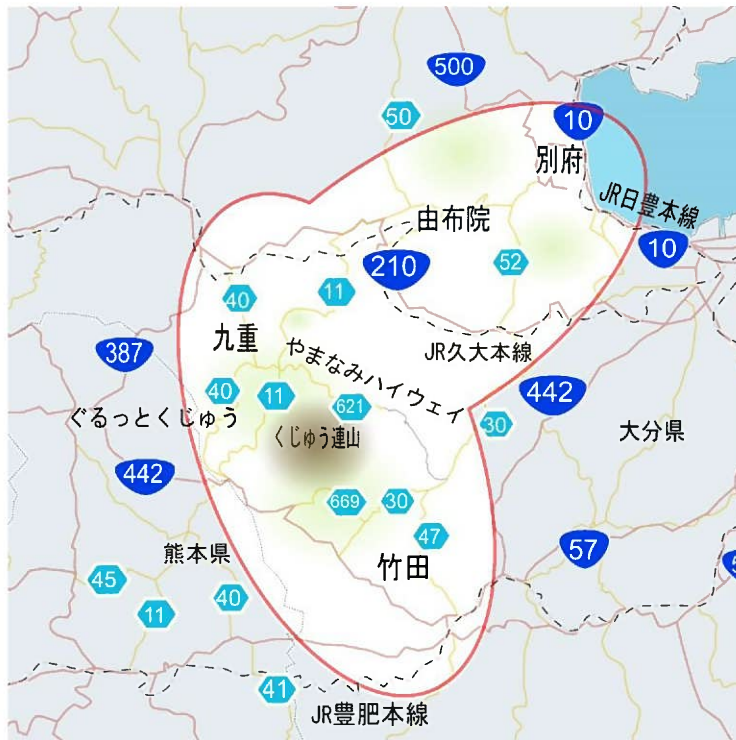


竹田市	九重町	由布市	別府市
			人口
			11・8万人
2・2万人	9千6百人	3・5万人	
			面積
477・5km ²	271・4km ²	319・3km ²	125・3km ²
2018/06/30 現在			



九州横断の道 やまなみハイウェイ

人のくに、美のくに九州 (日本風景街道 Q-8)



① やまなみハイウェイ

目次

一 九州を代表する雄大な風景

二 観光発展の基軸として整備された「やまなみハイウェイ」エリア

- 1 やまなみハイウェイ整備の経緯
コラム「油屋熊八」
コラム「国立公園化の経緯」
- 2 風景の見え方にこだわった「やまなみハイウェイ」の設計
コラム「変化するやまなみハイウェイの風景」
- 3 難渋した「やまなみハイウェイ」の建設
- 4 「やまなみハイウェイ」の現在
- 5 ぐるっとくじゅう周遊道路

三 「九州横断の道 やまなみハイウェイ」エリアの五つの魅力

- 1 九州代表格の雄大な自然
- 2 生活に溶け込む数々の温泉
- 3 人と自然が織りなす文化的景観
コラム「タテ原湿原」と「坊ガツル湿原」
- 4 ひっそりと佇む古（いにしえ）の面影
- 5 新たな観光のかたち

四 やまなみハイウェイを巡る各ブロックの「風景街道的」おすすめ

1. 別府ブロック
2. 湯布院ブロック
3. 九重ブロック
4. 竹田ブロック

五 道の駅、直売所等について

六 観光案内所など



② 狭霧台(さぎりだい)

一 九州を代表する雄大な風景

全国各地、魅力ある自然風景は数多くあるが、教時間のドライブにおいてずっとそれが途切れることなく続くような地域はそう多くはないのではなからうか。しかもその風景は壮大なスケール感をもって、あるときは遠景でパノラマ的に広がり、あるときは近景に迫り来るように移動につれて表情を変える。(写真①②③④⑤⑥)

柔らかな曲線を見せながら高くそびえるくじゅうの山々、うねりを伴いながらのびやかに広がる草地の高原、山肌から高く立ち上る水蒸気。遠くには平地から屏風のように立ち上がる阿蘇山系。道沿いに目をやれば放牧された牛や馬がのんびり草を食んでいる。春には視界すべてを若々しく力強い新緑が覆い、夏はすがすがしい風が高原を吹き渡る。秋には薄茶色の草木が大地を覆い、冬には一面の雪景色となり、ピンと張りつめた冷たい大気に包まれる。

「九州横断の道 やまなみハイウェイ」はこのような風景街道である。筆者自身、毎年何度もこの地を訪れるが、雄大な風景を見慣れている北海道や海外からの客人もこの風景の雄大さと広域性には圧倒されることしばしである。「九州横断の道 やまなみハイウェイ」は九州代表格の、全国でも屈指の雄大なスケールをもつ「絶景風景街道」である。



④ 久住高原(夏季)



③ くじゅう連山のミヤマキリシマ(春季)



⑥ タデ原湿原(冬季)



⑤ 久住高原のススキ(秋季)



図① 「九州横断の道 やまなみハイウェイ」の範囲

あらためて、「九州横断の道 やまなみハイウェイ」の範囲をみてみよう。実は「やまなみハイウェイ」の名があるため山間部のみと思われるが、東端は大分県別府市で別府湾を望む。別府市を起点として西に向かえば、順に由布市、九重町、竹田市がエリアに当たり、中心となる道路が総延長約百六十三キロメートル（別府市汐見町〜九重町湯坪瀬の本）に及ぶ。（図①）

すなわち、別府、由布院という世界に冠たる温泉観光地も、日本風景街道「九州横断の道 やまなみハイウェイ」にある。両温泉については多方面で紹介されており、ここで改めて繰り返す必要もないだろうが、いずれも新たな魅力を積み重ねて進化している。

むろん、「九州横断の道 やまなみハイウェイ」の温泉は、この二大温泉にとどまらない。地図をよく見ていただくと、エリア全体にわたって温泉が散りばめられていることがおわかりだろう。実際には、この地図に表示されていない温泉も数多い。地元の方々が日常生活で利用されるようなごく小さな温泉施設もある。言わずもがなであるが、泉質もバリエーション豊かである。（写真⑦⑧）

「九州横断の道 やまなみハイウェイ」は「温泉風景街道」なのである。



⑦ 釜の口温泉(うけのくちおんせん)〈九重町〉



⑧ ガニ湯(カニ湯)〈竹田市〉

目をルートの南側に転じてみよう。竹田市がルート南部の一部を占めている。同市中心部には、「荒城の月」のモデルとなった岡城趾があり、城下のまちなみも武家屋敷の名残をよく残す。また竹田市（ルート外ではあるが）や豊後大野市一带には、石橋や井路（水路）が多く残され、至るところで見ることが出来る。古いものは江戸時代の建設であり、明治、大正、昭和初期まで建設は続いた。それらの多くが今もなお、地域の人々の生活を支えている。ちなみに、久住エリアの草地の風景も、長年にわたる野焼きにより形成された歴史的資産である。

これらは、自然的制約条件の中で人々が生活を組み立てるために自然に手を加えるという「人と自然の応答関係」の中で歴史的に形成されてきた風景であり、「文化的景観」と呼ぶべき風景資産である。（写真⑩⑪）

そう、「九州横断の道 やまなみハイウェイ」は「歴史的・文化的風景街道」でもある。

さて、このガイドブックは、「九州横断の道 やまなみハイウェイ」の「絶景風景街道」「温泉風景街道」「歴史的・文化的風景街道」の三つの顔を中心として、風景街道的な視点から魅力を紹介してみたい。この地域の一般的な観光・レジャー情報については、数多くの観光雑誌、インターネットで十分に紹介されているので、それらに譲る。このガイドブックはある意味少し偏った、ウンチク系の知識もちりばめてみたいのである。

それでは、日本風景街道「九州横断の道 やまなみハイウェイ」を訪ね歩いてみよう。



⑩ 久住エリアの草地の風景



⑨ 岡城趾

二 観光発展の基軸として整備された

「やまなみハイウェイ」エリア

1 やまなみハイウェイ整備の経緯

冒頭の文は主に、大分県由布市水分峠と熊本県阿蘇市一の宮町を結ぶ、約五十二キロメートルの「やまなみハイウェイ」（正式名称は主要地方道二一〇号）から体験できる風景を描写したものである。先述したように、日本風景街道「九州横断の道 やまなみハイウェイ」には多様かつすばらしい魅力があるが、ルート名を見てもわかるように、やはり「やまなみハイウェイ」が代表格である。

さて、ここでちよつと想像してみたい。「やまなみハイウェイ」という道の存在なしに、我々は雄大なくじゅう・阿蘇の風景を見ることができたであろうか。

くじゅう・阿蘇地域一帯は、火山地帯特有の急峻かつ起伏の大きな地形が広大なエリアに広がっているため、その風景がどれほどすばらしいものであっても、その中を通る道がなければ簡単にその風景を体験できるものではない。この雄大な自然は自動車道があつて初めて体験できる風景となる。あわせて言えば、我々が体験できるのは道路からの風景であるから、風景の見え方は道路の位置やコース取りによって変わってくる。すなわち、風景の見え方は道路の位置やコースによって設計できる。実は「やまなみハイウェイ」はこの考え方を適用した我が国で最初の時期の道路である。

やまなみハイウェイの構想の原点は、「別府観光の父」と呼ばれる油屋熊八による「九州大国立公園実現提唱」とされており、それは一九二七年（昭和二年）のことであった。これは、自動車の発展を見越して、別府・由布院・くじゅう高原・阿蘇・熊本・雲仙・長崎間を観光自動車道でつなぐという構想である。

まだまだ自動車が普及していない時代に、地域の発展と自動車と観光とを結びつけ、それも九州スケールで発想するという先見性には驚かされる。もちろん熊八にとっては、別府温泉を核とした壮大なる総合観光ベンチャー事業の一部に過ぎなかったかも知れないが・（コラム 油屋熊八）。

ちなみにこの頃は、国による国立公園選定のための調査が始まり、全国各地でそれに向けた運動が盛んになった時期である。熊八の一連の動きも、この流れを積極的に受けてのことであつたことは言うまでもない（コラム 国立公園制定の経緯）。

「九州大国立公園実現提唱」の後、一九二九年（昭和四年）には大分、熊本、長崎の各県と沿道の主要市町村によつて「九州横断国際遊覧幹線期成会」が設立され、一九三一年（昭和六年）には「九州横断国際遊覧大幹線」の決定がなされた。しかし、この決定は戦時体制で手つかずとなる。

戦後、一九四八年（昭和二十三年）の横断道路建設期成同盟から再び事態が動き始める。一九五一年（昭和二六年）には別府国際観光港からの道路改修が始まり、一九六三年（昭和三八年）には由布院町から水分峠間が完成、翌一九六四年（昭和三九年）に日本道路公団の管理する有料道路別府阿蘇道路として全線開通した。

熊八の大構想は戦争を挟んでの四三年間を経てようやく実現したが、一九六四年（昭和三九年）といえど東京オリンピックが開催された年である。一九六五年（昭和四〇年）においても、我が国の乗用車の世帯普及率は一〇%弱であつたことを考えると、やまなみハイウェイは、本格的な自動車時代の到来よりも前に整備されたと言える。先人の偉業には頭が下がる。

そしてもちろん、地元にとつてはやまなみハイウェイの開通は広大な交通不便地域を解消するものであり、観光振興を待つまでもなく、農業や畜産業の振興の礎となっている。

なお、一九九四年（平成六年）には、料金徴収期間満了に伴つて無料開放され、現在に至っている。

油屋熊八

別府駅に降り立つと、なんとも変わったポーズの銅像が目に入る。別府観光の父と呼ばれる油屋熊八氏の像である（写真⑪）。

一八六三年（文久三年）伊予国宇和島城下（現愛媛県宇和島市）の裕福な米問屋に生まれ、大阪で相場師として成功したが、日清戦争後の失敗からアメリカに渡つて放浪し、三八歳頃に帰国して別府に移り住んだ。四八歳で亀の井旅館を創業し観光業に進出。六〇歳頃から、面日躍如の活動が始まる。やまなみハイウェイの原型となる、別府く由布院くくじゅう高原く阿蘇く熊本く雲仙く長崎間の観光自動車道の提唱、ルート上の長者原でのホテル建設、ゴルフ場の開設による温泉とスポーツを組み合わせる観光形態の提案、湯布院の開発、女性バスガイドの案内つきの定期観光バスでの別府地獄めぐりの運行・・・、その想像力、構想力、実行力には目を見張るものがある。氏は私財を投じてこれらを成した。

もちろん、別府の温泉は古くから知られ、別府港の開発とともに発展が始まつた時期ではあつたが、それだけではただの大きな温泉町である。温泉を基盤としながら、くじゅうや阿蘇までも含めた広域的視点で、かつ総合リゾートの拠点として別府を構想した最初の人物が熊八氏である。（写真⑫）

あらためて、別府駅前の銅像を見てみよう（写真⑪）。満面の笑みで、高く両手を挙げたポーズ。なぜか氏の後ろにはマンツの先をつかむ小さな子供が。。どこか見るものを脱力させ、笑顔にさせるその雰囲気も、氏の「おもてなし」なのだろう。



⑪ 油屋熊八の像



⑫ 油屋熊八とバスガイド

国立公園化の経緯

日本の国立公園は、一九三一年（昭和六年）の国立公園法の施行に始まる。最初の国立公園は、一九三四年（昭和九年）三月に指定された瀬戸内海国立公園、雲仙国立公園、霧島国立公園の三カ所であった。阿蘇くじゅう国立公園の始まりである阿蘇国立公園は同年十二月に、阿寒国立公園、日光国立公園、中部山岳国立公園、大雪山国立公園とともに指定されている。

内務省が阿蘇を含む国立公園候補地の調査を開始したのは一九二〇年（大正九年）である。翌一九二一年には、全国から国立公園設置や調査の要望が内務省に寄せられ、誘致活動も盛り上がった。同年、阿蘇においても阿蘇国立公園期成会の設立協議会が開催されている。

実は、内務省の初期の調査では阿蘇の評価はあまり高くなかったのであるが、一九二七年（昭和二年）時点で、調査担当者が「草原の風景の重要性」に加え、「自動車観光の重要性」と「自動車道による阿蘇とくじゅうの連結」に言及した記録がある。油屋熊八による「九州大国立公園実現提唱」は、まさしくこの年である。

熊八は国立公園指定と九州横断道を、希有壮大な夢想としてではなく、時代の流れに乗った実現性のあるものとして考えていたのである。

コラム

2 風景の見え方にこだわった

「やまなみハイウェイ」の設計

やまなみハイウェイは、国立公園の「阿蘇地域」と「くじゅう地域」の二つの地域を接続する（図②）。この二つの地域はそれぞれに特徴ある風景を有しているが、その間の地域においては遠くの眺め（阿蘇やくじゅうのやまなみ）は良いものの、道が建設される空間自体は魅力的なスポットにはあまり恵まれず、どちらかといえば単調な印象を否めない。すなわちこの二つの地域を結ぶ空間

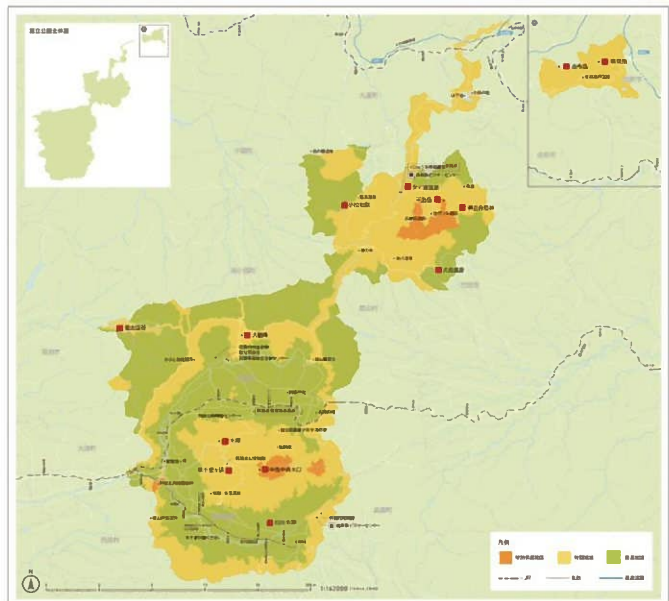
の魅力は、ドライブで移動しながら変化する遠くの眺め（近くの眺めではなく）を楽しむこととにあり、やまなみハイウェイの設計においては、この価値をいかに高めるかに注意が払われている。

このような道路設計の考え方はアメリカの National Parkway（道路公園）に倣うものである。

「やまなみハイウェイ」は「伊豆スカイライン」と並んで一九六〇年（昭和三五年）に計画許可を受け、我が国で最初のパークウェイとなった。

ちなみに、当時の道路公団は名神・東名高速道路建設の基本方針として「美しい道路を創る」ことを掲げていたが、未だそのノウハウがなく、パークウェイの整備はその前段階として位置づけられていた。やまなみハイウェイをはじめとするパークウェイ整備の経験が、名神・東名高速道路の設計のベースとなったのである（牧ノ戸峠の駐車場には、日本道路公団初代総裁の岸道三之碑が置かれている。興味のある方は訪れてみて欲しい）。（写真⑬）

阿蘇くじゅう国立公園



図② 阿蘇くじゅう国立公園



⑬ 日本道路公団初代総裁の岸道三之碑
（牧ノ戸峠駐車場）

さて、ドライブで移動しながら遠くの眺めを楽しめるような道路の設計とはどのようなものであろうか。その特徴として大きく三つが挙げられよう。

一つめは、道路を稜線（尾根筋）上には置かず、できるだけ緩やかな谷や低地を縫うように収めている。この結果、道路から離れたところにある山岳や高原の稜線輪郭を眺められるようになっていく。単調な印象を否めないエリアで見るときは遠くの見応えのある風景である。

二つめは、地形の厳しい場所を避けていることである。このため、道路とその周辺になだらかな余裕空間が生まれ、遠くの風景に安心して自然に意識を向けながらドライブできる環境が創り出せていく。区間中にはトンネルは一方所もなく、橋梁も少ない。盛土・切土も小規模である。防護柵が必要である区間も、視界を妨げないガードケールが採用されている。これらのため、緩やかに地形に沿い、視界を妨げられないドライブが楽しめる。

三つめは、道路を含む沿道の空間がすべて国立公園の特別地域に指定されているため、沿道での民間施設や建築物の立地や意匠をコントロールすることが可能となっていることである。この結果、ドライブインや休憩施設を含め新たに設置しようとする際は、風景への馴染みが担保される仕組みがある。（写真⑭）

以上の知識を得た上で、もう一度、現在のやまなみハイウェイの風景を思い起こしてみよう。私たちがなにげなく「うつくしい」「快適」「眺めがいい」と感じている風景は、当時の最先端の思想と技術によって創られたものであることを心に留めておきたい。



⑭ 「やまなみハイウェイ」遠くの見応えのある風景

変化するやまなみハイウェイの風景

やまなみハイウェイの開通から五〇数年。沿道の風景は設計・建設当初の状況とかなり変わっている。開通当初は小さかった沿道の樹木が、今ではすっかり高木となって道路から遠方を眺めることができな場所が増えてきている。当初の風景を取り戻すためには、これらの木を伐採する必要があるのだが、民有地にある樹木なので行政が手を出しにくいところもあった。最近になって、日本風景街道「九州横断の道やまなみハイウェイ」では、民間主導の風景街道活動としてこれらの木を伐採して眺望を確保する活動を開始したところである（写真⑮）。近い将来、やまなみハイウェイの設計・建設時に意図していた風景を、我々も楽しめるようになることを期待したい。



⑮-1 伐採前



⑮-2 伐採後

コラム

3 難渋した「やまなみハイウェイ」の建設

やまなみハイウェイの建設は、一九六一年（昭和三十六年）十月に始まった。美しい景観は、設計だけでできるのではなく、工事を通して初めて実現する。しかし、この工事は寒さと大雨、土質との闘いとなり難渋を極めた。

山岳道路区間は標高が千メートル以上あり、冬期には零下十七度、土の凍結深さは三十センチメートル以上、つらら一メートル以上、霜柱二十センチメートルという環境になる。さらに地盤は黒ぼく、赤ボク、ボラと呼ばれる火山灰性の土で、強度が極端に弱い。

道路を支える地盤の盛り土には強度改良の必要があるし、そもそも土壌改良しないと重機すら埋まってしまう動かせない。せっかく削った法面は、凍結と融解の繰り返し、あるいは雨でも簡単に崩壊する。舗装した路面も凍結や雨水で変形する。これに加えて、夏の集中豪雨では工事現場までの道も寸断される。

このように建設工事は悪条件の自然との闘いそのものであった。その厳しさは、一般労働者が休暇などで現場を離れると帰って来なくなるほどであり、この結果、大分刑務所の受刑者（軽度刑）が動員されたという事実が物語っている。

着工から三年。一九六四年（昭和三十九年）六月に「やまなみハイウェイ」は開通した。長者原のビジターセンター向いの駐車場には十四名の名前が記された慰霊塔が建っている（写真⑯）。今では、当たり前のようにあるごく自然な風景であるが、それはこのような方々の苦闘によって「創られた」ものである。



⑯ 十四名の名前が記された慰霊塔

4 「やまなみハイウェイ」の現在

「やまなみハイウェイ」は今や、九州のドライブ観光コースの王道に位置づけられ、またくじゅう連山の登山拠点として、さらには様々な温泉巡りのルートとして多くの観光客を惹きつけている。最近では国内だけでなく、海外からの来訪客も多くなってきた。

ただし観光客が増加することでの問題もある。特にゴールデンウィーク等の行楽シーズンには、駐車場に入りきれない車が路側にあふれ、渋滞が深刻になっている。運転に不慣れた海外観光客が関わる事故も増えてきている。できれば行楽シーズンはずしたほうがゆっくりと巡れるのだが、行楽シーズンに出かけられる方は時間に余裕を持った計画を立てられることをお勧めしたい。

5 ぐるっとくじゅう周遊道路

「やまなみハイウェイ」をドライブしていると、最近、山のマークに「ぐるっとくじゅう周遊道路」と表記された青い案内看板を目にするようになった（写真⑰）。

これは、阿蘇くじゅう国立公園の一部であるくじゅう連山を周遊する国道、県道、市道、約七十キロメートルの道路を一つのルートとしてとらえ、道路標識等を統一してより分かりやすく巡ってもらえるように名付けられたものである（図③）。山のマークが「ぐるっとくじゅう周遊道路」のシンボルで、このマークを辿ればよい。四季折々の表情を見せる高原や温泉、湧水など、多様な見所を辿ることができる。

なお、ルートコースの性質上、ひよっとすると「ぐるっとくじゅう周遊道路」



⑰ 案内看板「ぐるっとくじゅう周遊道路」

「やまなみハイウェイ」「日本風景街道九州横断の道やまなみハイウェイ」が同じなのか違うのか混乱するかも知れない。まあ、あまり気にせずとも良い。少し移動すればまたすぐに新たな案内標識・看板を見つけれられるから。これらはエリアを一体的にイメージしてもらえするための仕掛けなので、いずれかの表示を辿れば見所に簡単に行き着けるだろう。



図③ 「ぐるっとくじゅう周遊道路」地図

三 「九州横断の道 やまなみハイウェイ」 エリアの五つの魅力

1 九州代表格の雄大な自然

日本風景街道「九州横断の道 やまなみハイウェイ」のエリアには火山が多い。むしろこのエリアは火山でできていると言ってもよい。由布・鶴見岳からくじゅう連山、そして阿蘇山は別府湾から有明海、島原半島へ続くいわゆる「別府―島原地溝」内に並んでおり、それぞれの火山の噴火の時期、噴火の形態やマグマの性質等により、魅力ある多彩な地形が形成された。(図④)



図④ 九州の活火山

たとえば、粘性の高いマグマが噴出すると溶岩ドーム状になり(三俣山、黒岳など)、比較的柔らかいマグマの場合は溶岩流によって富士山のような成層火山(平治岳、大船山など)となる。また、噴火にともなう大規模な火砕流によっていわゆる火砕流台地(飯田高原など)が形成される。その上で、こうして

生まれた地形は、浸食によって削られて切り立った形状となり、裾野には岩屑なだれの堆積物のせき止めで湿原が形成される(タデ原、坊ガツルなど)。また、火山灰流や岩屑なだれ堆積物、土石流堆積物は時間をかけて火山麓扇状地(くじゅう連山の周辺地帯)を形成している。

多様な地形と地質はまた多様な生態系・植物を育む。黒岳を代表格として、エリア内には手つかずの原生林が多く残り、ブナや様々な種類のカエデをはじめとした多種の樹木や植物が群生している。また、標高の高い場所ではミヤマキリシマなどの低木の自然林が広がり、高山植物が多く自生する。(写真⑱)

さらに、火山性台地に形成された湿原には、ヨシやヌマガヤ、ススキなどの他に、ノリウツギやクロマツなどの林が形成されている。そして湿原のあちこちには小さな花を咲かせる様々な種類の高山系植物が見られる。

そして何よりも、このエリアの象徴的な風景をなすのは草地であろう。また後ほど触れることになるが、草地は手つかずの自然ではなく、人の手が入って創られた自然である。牛馬の飼育に適した草を得るために、春の野焼き、あるいは草刈りや放牧を通じて形成され、今も人の手を通じて維持されている。(写真⑲)

開けた湿原、山裾の斜面やうねりをとともなう高原台地の広大な草地は、このエリアの雄



⑲ 野焼きの風景



⑱ ミヤマキリシマ群生

大な風景を構成する大きな要素であるが、それはこの地で生きてきた人々の努力の積み重ねの偉大さを示すものである。

東西約三六キロメートル、南北約四八キロメートルの広大な「九州横断の道やまなみハイウェイ」エリアには、以上のような自然があふれんばかりに詰め込まれている。そしてそれらは圧倒的なスケール感と繊細さの双方をもつて訪れる者の前に立ち現れる。

この雄大さと繊細さを兼ね備えた大自然を味わうにはドライブだけではもつたない。もちろん、ドライブでは移動によって刻々と移り変わる風景を楽しむことができる。まして、やまなみハイウェイはそれを意識した道路であるから、そこから見える風景は格別である。一方で、ドライブで見ることができないのは、運転する車からの遠景である。すなわち雄大な風景の骨格である。

一旦、車を降りれば自分を取り巻くミクロな世界に目をやることができる。散策やちよつとしたハイキング、あるいはサイクリング。健脚な方にはトレッキングから本格的な登山まで、「九州横断の道 やまなみハイウェイ」は様々な方法で楽しむことができる。特に登山については、九州代表格の山々が連なっており、「坊ガツル賛歌」が示すように、全国の登山愛好家を長く魅了し続けている。(写真⑳)

2 生活に溶け込む数々の温泉

日本風景街道「九州横断の道 やまなみハイウェイ」エリアには火山が多いが、同時に温泉も多い。別府、由布院を筆頭として、多くの温泉がエリア内に



⑳ くじゅう登山

散在する。数多くの温泉施設が密集する温泉地もあれば、小さな民宿あるいは地元の方々が利用するような共同浴場が一つだけというこぢんまりした温泉もある。もちろん、泉質や湯温あるいは山の中、川沿い、まちなかや村の外れといった立地の場所も様々である。温泉だけを目当てに巡っても何日も飽きることなく過ごせるだろうし、お気に入りの温泉を見つけて足繁く通うのもよい。

それぞれの温泉については、各種の観光情報で紹介されているので、ここでは一つだけ、風景街道らしい切り口で解説をしておきたい。それは「文化的景観」として温泉の風景を味わうことである。

「文化的景観」とは、文化財保護法によると「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」とされている。少しわかりにくいのでかみ砕いて言えば、今ここにある自然や人工物の物理的な眺めとしてのみ捉えるのではなく、その眺めを自然と人為が長い時間を通じて関係し合ってきた文化的・生産的営みの姿として捉えようとする見方である。たとえば、棚田や焼畑農地あるいは山岳宗教の古道や宿坊町がその代表例である。

この意味で言えば、われわれが普段目にする普通の風景も大なり小なりの文化的景観としての性質を持つわけであるが、とりわけ代表例としてあげた風景のような、自然と人為の歴史的相互作用が端的に現れている景観もあり、通常はそれらを文化的景観と呼ぶ。その上で特に重要なものは国が選定し、重要な文化的景観とされる。

話を温泉の景観に戻そう。

前置きが長くなったが、実は別府の鉄輪・明礬地区の風景は、二〇一二年（平成二十四年）に「別府の湯けむり・温泉地景観」として「重要文化的景観」の指定を受けている。

温泉そのものは火山と豊富な地下水が存在し、それが扇状地の随所から湧出・噴出するという純粹に自然の現象であるが、この上で展開される人の営みによって一体的な温泉地景観が形作られていることが評価されたのである。

たとえば、高く立ち上る湯けむりの風景は、高温の沸騰泉から温泉水を得るために装置によって温泉蒸気を分離し放出するという人為によるものである。また、明礬温泉では石敷きの床に青粘土を敷き詰めた藁葺き小屋の風景が見られるが、これは「湯の花」製造という産業の風景である。すなわち、自然を活用する人の営みの風景である。

あるいは、鉄輪温泉・明礬温泉では旅館や貸間が多くあるが、これらは江戸時代の旅籠・木賃宿に起源を持ち今に生きる歴史・文化・産業的な資産である。さらに、地区内に多く見られる共同浴場施設は、地元の方々が組合によって長く管理・運営し、利用してきたという意味で、ハード・ソフト両面が混ざった生活文化そのものである。これらは温泉という自然条件の上でこそ成立した生業（なりわい）と生活の習慣・作法であり、やはり自然と人との合作の風景と言ってよい。

このような風景の見方を知った上であらためて温泉地を眺めると、少し違って見えるのではないだろうか？ひとひとつの事物の背景に、それがそこにある理由や歴史の積み重ね、そしてそれらを担ってきた先人達の苦労や楽しみ、あるいは温泉で寛ぐ家族の顔……。そういったイメージが浮かび上がって来ないだろうか。するとその風景はあなたにとってより身近な愛しみ深いものになるだろう。

3 人と自然が織りなす文化的景観

温泉以外にも、日本風景街道「九州横断の道 やまなみハイウェイ」エリアには人々の営みの歴史を物語る風景に富んでいる。特に、「草原」と「石」に関連する風景は、「温泉」とともにこのエリアを特徴づけている。

〈文化的景観としての草原〉

● 「野焼き」に支えられた草原の風景

「九州横断の道 やまなみハイウェイ」の特徴的な風景は何かと問われれば、まずはのびやかに広がる草原が真っ先に思い浮かぶだろう。火山性地形の高地に広がる草原は、国立公園指定の折りにも重視されたことは先に紹介したとお

りである。そして既に何度か触れたように、この草原は人の手が介在して形成・維持されている性質のもので、文化的景観としての価値がある。(写真⑳)

まず、くじゅう・阿蘇地域の地形と気候を思い起こしてみよう。火砕流台地や火山麓扇状地が地形のベースとなっているが、長い間の浸食を受けて起伏が多く、急傾斜の尾根・谷筋も多い。また、水の湧き出る場所は限られており、うねりの多い地形と火山性地質のため、水を広く供給することもできない。加えて標高の高さゆえ気温も低い。これらから、全体としては田畑としての利用には適さない。

林業についてはどうだろうか。やまなみハイウェイ沿道の樹木が遠望の景観を阻害するほど成長していることから、土質も気候も条件は悪くないのだろう。ただし、歴史的には木材の搬出手段に問題があった。古くから森林業が発達した地域は、比較的大きな河川によって木材を下流に搬出した。この地域ではそのように河川を利用できる場所はごく限られている。林業振興のためには、道路整備を待たなければならなかったのである。

残るは牛馬等の牧畜である。限定されてはいるが条件の良い場所では田畑が可能であり、耕作や荷物の運搬には牛馬が必要である。そしてその飼料となる草も必要である。草は木以上に場所を選ばず、成長も早い。田畑や林業に向かない土地も、草の生育地としては問題ない。比較的平らな土地であれば効率よく採集もできる。放牧であれば多少の起伏があっても牛や馬が自ら移動して草を食んでくれる。このように、耕作や林業に向かない土地も、牧畜であれば大きな可能性を見いだせる。

実際、このような理由から、くじゅう・阿蘇地域では数百年も前から牛馬の



㉑ 草原風景

牧畜が営まれてきた。そして一九七〇年代には国土計画の一環として、この地域を乳・肉用牛を生産する大規模基地とするプロジェクトが導入されてもいる。過去も現在も、くじゅう・阿蘇地域と牧畜は切っても切れないつながりがある。

牧畜の背景を踏まえたところで、話を草原に移そう。この地域では木も草も順調に成長する。それらが何年も順調に成長すればそこは林になり、しばらくすれば森になるはずである。この地域が林や森にならず、草原のままであるためには、何らかの外力が必要である。それが人の力である。

牛馬の餌となる草を毎年採集するためには、林や森が形成されては不都合である。また放牧をするにしても草地は広大かつ見通しが良い方がよい。そこで行われるのが「野焼き」で、成長しかけた木々を焼き払い、森林化を防止する。また野焼きによつて、牛馬が好んで食べる草の新芽が発育しやすくなる。あわせて、ダニなど人畜に有害な虫の駆除もできる。毎年継続して野焼きを実施することで、その地帯は一面の草原として維持される。



㉒ 野焼きの風景

牧畜のために自然を最大限に利用してきた結果としての風景。これが、文化的景観としての草原である。(写真㉒)

●新たな時代の文化的景観としての草原

とはいえ、今この時代においては「草原が牧畜の営みによつて形成・維持されている」とは必ずしも言えない。「牧畜の営み」を取り巻く環境が大きく変化し、現在では畜産関係者の高齢化・後継者の減少、そして地域の過疎化による野焼きの担い手の不足等の問題が深刻である。実際、これらの背景から一九六〇年代後半から一九七〇年には野焼きは実施されなくなり、草原の荒廃が始ま

った。「牧畜の営み」の観点からは、草原の必要性・必然性が希薄になったわけである。

それでは、「草原」はもはや必要ないのだろうか。たとえ牧畜との直接的つながりが小さくなったとしても、それでも草原は多様な価値を有することを強調しておきたい。

まず、たとえ牧畜との関係が以前と比べて小さくなったとしても、長い時間をかけて引き継がれてきた風景の「歴史的・文化的価値」がある。人々は草原を目にすることで、この地域の生業や生活の歴史に思いを遣り、この地域や文化に対する理解を深めることができる。草原はその縁（よすが）である。

また、「生態系保全上の価値」がある。全くの手つかずの自然は、時間の経過と共に変遷し、生態系的には単調で生物多様性の低い状況に推移していく。それを野焼きによって防ぎ、草原という状態によって豊かな生態系が維持されるのである。実際、我々の目を楽しませてくれる高原希少植物も、野焼きによって保全されている。

そしてこれら二つの価値の上で「観光的価値」がある。国立公園指定の際も「草原」と「自動車観光」が結びつけられていたように、草原は外部から人を引き込む資源である。観光は、宿泊・飲食・買い物を通じて地域の経済に貢献できる。地域生活の持続可能性を高める機能を有するのである。

現在、私たちが目にしている草原は、以上のような新たな価値への認識から、「九州横断の道 やまなみハイウェイ」エリアの人々によって復活した野焼きに支えられたものである。牧畜の営みのみに頼るのではなく、新たな担い手と新たな方法論による「復活」である。

「タデ原湿原」と「坊ガツル湿原」

「タデ原湿原」と「坊ガツル湿原」は、大きな復活を遂げた代表例である。すなわち、「タデ原湿原」での野焼きは一九九七年（平成九年）に再開され、「坊ガツル湿原」での野焼きは二〇〇〇年（平成十二年）に再開された。いずれも現在継続中である。双方ともに、地元住民団体のほか、新たに観光関連団体、自然保護系市民団体など、多様な市民・住民が新しい担い手となるとともに、九州電力をはじめとした民間企業の資金的・人的支援を得て継続されている。新たな時代に対応した新たな方法による野焼きへと変貌を遂げたのである。野焼きの継続によって以前の姿を取り戻した二つの湿原は、二〇〇五年（平成一七年）に、国際的に重要な湿地を保全する「ラムサール条約」に登録されるに至った。「これまでの文化的景観」に新しい意味が付け加えられ、「新しい文化的景観」が創造されたと言えるだろう。（写真⑳）

ちなみに、「九州横断の道 やまなみハイウェイ」の活動目的の一つが「草原景観の復活・保全」であり、本風景街道関係者はこれらの野焼きの継続に大きく貢献されている。関係者の努力に敬意を表すとともに、今後も野焼き活動が継続できるように祈念するものである。



⑳ 野焼きの作業風景

〈二石の文化〉が埋め込まれる里の風景

熊本県から大分県にかけては、石橋や石垣などの石造構造物が多く残っており、ドライブ中の車窓からでもよく見ることが出来る。ちなみに全国に残る石橋の九十パーセント以上が九州にあり、そしてその半数以上が熊本・大分県両県内にあるとのことである。熊本県・大分県は全国的に見ても稀な「石の文化エリア」である。当然のことながら、「九州横断の道 やまなみハイウェイ」エ

リアの中にも石橋などの石造構造物が残っており、特に竹田市内にはまとまって、今も現役で活躍している。(写真②4)

●「石の文化」が根付いた背景

全国的に見ても、石橋を中心とした「石の文化」は熊本・大分両県に特に根付いている。その理由については、「石造でしか実現することができないこと」があり、「その用途のために適した石に恵まれていること」、「石を加工する技術があったこと」、「の三つの観点から説明できそうである。

「石造でしか実現することができないこと」は、この地域の地形と関係がある。阿蘇山の噴火火砕流により形成された台地には、長い年月をかけて浸食を受けていくつもの谷筋ができ、その谷間の中に細く掘り込まれた川が流れる地形が形成されている。集落はこの谷筋に作られるので、移動には必ず橋が必要になる。ただし、細くて深い川の流れは急で時には洪水も起こす。木造の橋では到底耐えられないため、流されない石橋が有利となる。

二つめの「その用途のために適した石に恵まれていること」については地質と関係がある。阿蘇山の噴火火砕流によりこの地域を覆った火山灰は、熱や圧力を受けて熔結凝灰岩となったが、この岩は比較的軽い上にやわらかいため加工しやすく、橋などの材料に適している。その石が手近かに豊富にあるのである。

三つめの「石を加工する技術があったこと」については、熊本城が関係しているようである。加藤清正は、当時最高の石積み技術を持っていた「穴太衆(あなしゅう)」を、近江から呼び寄せて築城にあたらせた。城は一六〇七年(慶長一二年)に完成したが、その後、穴太衆は河川改修や干拓堤防の築造、水路の整備などの土木工事を担い、その過程で彼らの技術が地元(石工や民衆たち)に伝わって地元技術化し、周辺各地に伝播したようである。ちなみに大分県内で現存する最古の橋は一八〇六年(文化三年)のものである。



②4 岩戸橋

●農業安定のための悲願を実現した近代の石橋

通常、橋というと人が通る道としての橋を思い浮かべる人が多いだろう。熊本・大分県内では道としての石橋もあるが、農業用水路としての石橋も多い。それらの多くは明治から大正にかけての時代に建設されたものである。

先ほど、谷間の中に細く掘り込まれた川についてこの地域の地形的特徴として触れた。このような地形においては、目の前にある川の水位が非常に低いため、大きな動力がない時代には水を十分に汲み上げることはできず、遙か上流から緩やかな勾配で水路を引いてきて灌漑する必要があった。場合によっては数一〇キロメートルを超える水路を、岩が多い地質の中、時には谷筋を越えて建設しなければならぬが、それには、技術に加え莫大な資金が必要となる。実際、江戸時代後期に地元の庄屋個人の資産や借金で建設を試みて何度も失敗した話が残されている(興味のある方は、宇佐で活躍した南一郎平の業績を調べてみてもらいたい)。

このような水路がなかった時代は、耕作できる土地は限られ、また水不足に悩まされることもしばしばであっただろう。灌漑のための水路(この地方では井路と呼ぶ)の建設は地元の人々の悲願であった。しかしそれは簡単には実現しなかった。

実際に井路の建設が進んだのは、明治・大正の時代に入ってからである。これは、井路による灌漑は農業振興を目的とした公共事業として位置づけられたことによる。

●風景に溶け込みながらも存在感のある石の構造物

石橋や井路がある風景は、この地域の自然条件の中で人々が暮らすための工夫の歴史的積み重ねの風景であり、この意味で文化的景観である。ただし、それを抜きにしても石の構造物は美しい。一定のボリュームがあるのに決して自己主張しない。周りの風景に馴染んで溶け込んで存在感がしつかりとある。力強く、しかし静かに佇んでいる。そのような美しさである。石という材料、構造物の設計・デザインと建設技術、長い時間の経過、そしてまわりの

美しい農村の風景・・・これらの創造的コラボと呼んでよいだろう。見る者に郷愁にも似た感覚を引き起こすことのできる土木構造物は、今の技術者にとってもお手本である。

写真には、竹田市内にある二つの構造物をあげておこう。明正井路（めいせいいる）第一拱石（こうせつ）橋と白水（はくすい）堰堤である。いずれも当時の大分県の技手の設計による。（写真②⑤⑥）

明正井路第一拱石橋は六連アーチ橋で、一九一九年（大正八年）の竣工である。連数（六連）、橋の長さ（七八メートル）共に日本一の石橋水路橋で、現在も水路として利用されている。なだらかな山の中に、大規模ではあるがそれをあまり感じさせないアーチ橋が道路と川を跨ぐ形で架かっている。長い年月を越えてきた石橋は黒く落ち着いた色合いで、周囲の山の中に溶け込んでいる。

白水堰堤は、「日本で一番美しい」と称されることもある。知る人ぞ知る農薬用水ダムで、一九三八年（昭和一三年）竣工である。厳密に言えばコンクリートダムであるが、当時コンクリートが高価だったため、表面を石造とした。ダムの左右は形が異なっており、右岸端部には武者返し（むしゃがへし）の曲面（まへま）流路、左岸端部には階段状（かたがた）の流路となっている。これは、それぞれの地形・地質に対応した結果である。ダムを越えて水が流れる様子は、ダム表面の石の凹凸によって、幾重もの



②⑤ 明正井路（めいせいいる）第一拱石橋



②⑥ 白水堰堤

ドレープ（drap）が翻りながら滑り落ちていくようで、いくら見ても飽きない魅力がある。

4 ひっそりと佇む古（いにしえ）の面影

竹田市竹田は、江戸時代を通じて岡藩の政治・経済・文化の拠点として栄えてきたまちである。竹田のまちは地形的におもしろい。すなわち、東西南北いずれの方角からもトンネルをくぐらなければ到達できないため「蓮根町」とも呼ばれる。まちはこのトンネルが通じる山に囲まれた小さな盆地にあるため、視界の中には常に山が近く映り込み、こぢんまりとして落ち着いた印象を訪れる者に与えてくれる。

竹田のまちな見所はなんとと言っても岡城趾と城下町のまちなみであるが、この二つの関係も興味深い。城下町が城郭から一キロメートル程度離れている上に、地形の関係から城下町から城が見えない。「城の見えない城下町」は全国でもそう多くはなく、竹田のまちな独特な雰囲気醸し出している。

岡城と竹田の城下町については、多くの観光ガイドブックや関連資料に紹介されているので、ここで詳細に説明するものではないが、現在わたしたちが見ているような姿になった経緯と背景について少しだけ触れておこう。（写真②⑦）

岡城（今では城郭がなく岡城趾であるが）は一八五五年（文治元年）に緒方惟義が源頼朝に追われた源義経を迎えるために築城したことが始まりとされ、一五九四年（文禄三年）に中川氏の入封によって岡藩の城となった。初代藩主の中川秀成が城の整備を積極的に進めており、現在残されている壮大な石垣はこの時代に築かれたものである。

一五九四年は、秀吉による全国統一（一五九〇年）の後、二度の朝鮮出兵（一五九二年、一五九



②⑦ 岡城趾

七年)の間の時期で、関ヶ原の戦い(一六〇〇年)の直前の時期である。ちなみに熊本城は一五九一年(天正一九年)に築城が始まっているため、岡城と同時期である。秀吉の天下統一後とはいえ、時代は混乱の真最中である。戦を強く意識して高く切り立った石垣に護られる広大な城郭が築かれたのであろう。石垣の施工にはやはり穴太衆があたっている。

岡藩は江戸期を通じて竹田を治め、大きな混乱もなかったため、城下町も平和の中で発展している。ただし、明治の時代に入って一八七一年(明治四年)に廃城令を受けて城の建造物がすべて壊され、さらに一八七七年(明治一〇年)には西南戦争によって竹田のまちの大部分が消失した。

滝廉太郎が竹田の地で過ごしたのは一八九一年(明治二四年)からの二年半であるが、彼が見た竹田のまちと岡城は、未だ廃城と西南戦争の傷跡が生々しかったに違いない。「荒城の月」のイメージはそのような状況の中で生まれている。

なお、竹田の城下町は西南戦争で大きなダメージを受けたが、幸いなことに「武家屋敷通り」と呼ばれる地区は戦災を免れた。また、戦災を受けた地区においても基盤の目状の町割りが残る形で復興されている。その後、太平洋戦争による空襲も受けなかったため、まちは比較的古い形を保ちながら今に至っている(写真⑳)。今、私たちが見ている風景はこのような幸運と不運の歴史的経緯を経たものである。

そして現在。竹田の人々は新たな風景を付け加え、まちの将来を創ろうとしている。毎年四月上旬の雅な大名行列が行き交う「岡城桜まつり」、一月上旬のまちを灯籠が埋め尽くす「たけた竹灯籠 竹楽(ちくらく)」、武家屋敷の活用や、移住者による新たな活動などなど。そして竹田市も、少子高齢化の深刻さが増す中で、より暮らしやすいまちを目指して「竹田



⑳ 武家屋敷通り

市都市再生まちづくり基本計画『城下町の将来』を平成二九年度に策定し、動き出している。(写真㉑)

5 新たな観光のかたち

近年、観光の形が大きく変わりつつある。かつては大人数の団体旅行が多かった時代もあったが、今は個人や小グループの旅行が主役となっている。旅の目的と移動手段、旅の日数と費用も多様化している。さらに最近はいンバウンド(外国人)客も急増しており、彼らの旅行も急速に多様性を増している。

いかに観光的資源に恵まれていてもこのような多様性に対応しなければ、観光客は他の魅力的な場所を選択することになる。観光客は多ければ多い方が良いというわけでもないが、地域の持続可能性を確保するための収入の獲得は重要である。そのためには他の観光地と比べても魅力的で質の高いコンテンツを提供し、「ブランド」を確立しなければならない。

「九州横断の道 やまなみハイウェイ」でも、このような新たな時代の観光に対応する動きがあり、是非とも体験してみたい。ここでは興味深い動きとして「竹田式湯治」と「九州オルレ」を紹介しよう。

〈竹田式湯治〉

「竹田式湯治」とは、竹田市ならではの温泉や体験、食などのサービスの提供を受け、心身ともにリフレッシュできる「現代版湯治」のことである。具体的には、「歩いて、温泉浴して、食べて、笑う」ことをすべて体験することで自然治療力を引き出し、細胞や精神的な免疫力を高めるといって、予防医療と観光を組み合わせた「ヘルスツーリズム」を推進し、「国民保養温泉地」のまちづく



㉑ たけた竹灯籠 竹楽

りを目指すものである。(写真⑳)

温泉の効果を予防医学に利用するためには、二〜三泊の「ちよつと湯治」を年に二〜五回程度行うことが良いようで、そのような「健康志向の滞在型・リゾート型の観光」がターゲットになる。

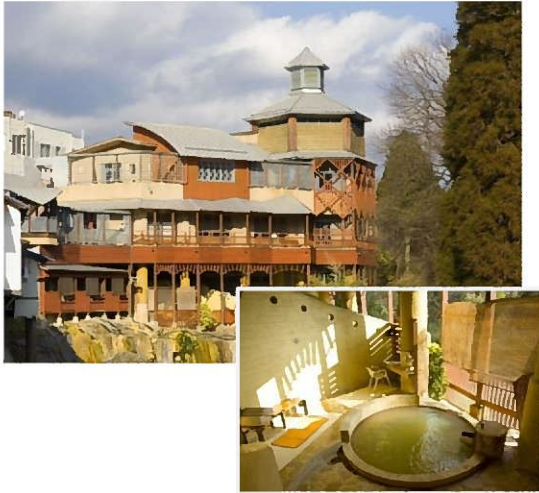
さて、この「竹田式湯治」。それが意味するところはかなり奥深い。たとえば「歩く」を考えてみよう。歩きたくなるためには魅力的な目的地やコースが数多くなければならぬ。まちなかであれば歴史や文化の資料館などの文化的施設、まちなみやまちの風景、街路そのもの、工房やショップ、そしてレストランなど、山間部であれば風景のよい場所や、比較的整備されたトレッキングルート、あるいは休憩施設など。あわせて、まちなかでも山間部でも、楽しく案内し解説してくれるガイド。これらがすべて魅力的でなければならぬ。

「食べる」も同様である。竹田ならではの「食」として、農産物、川魚や肉といった食材、伝統料理・創作料理、料理人、雰囲気の良い食事処や従業員など。「温泉浴」も「笑う」も同じように、様々な資源とともにそれを楽しむ仕掛けや仕組みがセットになっている必要がある。(写真㉑)

このように考えると、「竹田式湯治」の推進が、どのような分野・内容であれ



⑳ 「長湯温泉」パンフレット



㉑ 長湯温泉療養文化館「御前湯(ごぜんゆ)」

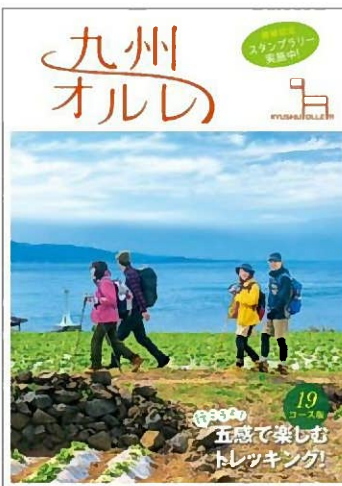
竹田市の行政施策、各種の民間産業、市民活動のすべてとつながることが理解できよう。「竹田式湯治」は、竹田市が魅力的で持続可能なまちになるための大きな旗頭である。

「竹田式湯治」を十二分に楽しむ秘訣を一つ。竹田市内に宿泊する方は「竹田式湯治パスポート」を入手しよう。このパスポートによって、竹田市による日本初の取り組みである「温泉療養保健システム」にもとづく給付と、宿泊料及び入浴料の割引、食事処でのサービスなど、様々な特典を受けることができる。「新しい湯治スタイル」を存分に味わって欲しい。

〈九州オルレ〉

「オルレ」はもともと、韓国・済州島の方言で「通りから家に通じる狭い路地」を意味し、地域の食や歴史、文化などに触れながら自然豊かな小道を歩くトレッキングコースのこと。済州島では二〇〇七年に初のコースができて以来、全島で整備が進み、多くの人が楽しんでいる。韓国においても、遠くの有名観光地に行き、定番の名所を巡る従来型の観光から、自身の足でゆっくり移動し、名所スポットではなくむしろ途上での体験を楽しもうとする新しい形の観光にシフトしているのだろう。

「九州オルレ」は、このオルレを九州で展開し、自然豊かな九州の魅力が国内外の観光客に再発見してもらおうと、官民連携の九州観光推進機構が取り組んでいるもので、二〇一二年(平成二四年)の佐賀、熊本、大分、鹿児島の四県、四つのコースの認定を皮切りに、二〇一八年(平成三〇年)四月現在で一九のコースが九州内で認定されている。なお、認定に際しては、十数キロメートルを四〜五時間でめぐれるもの、主に未舗装の自然道であること、途中でリタイアしても公共交通を利用できること、などの条件があるとのことである。これらの条件からも、万人が楽しめることが重視されてい



㉒ 「九州オルレ」パンフレット(表紙)

ることがわかる。(写真③②)

観光の推進に対して九州内で広域的に連携すること、海外客、特に韓国からの観光客を強く意識していること、そして歩くことと小さな体験を観光の柱としていること、これらは新たな観光のかたちの提示であり、風景街道の観光の考え方も非常に近いものである。

さて、「九州横断の道 やまなみハイウェイ」内の九州オルレは「奥豊後コース」「別府コース」の三つがある。「奥豊後コース」は岡城を含む里を歩く一・八キロメートルのコース、「別府コース」は志高湖周辺の林道を巡る一・一キロメートルのコースで、それぞれに魅力的なコースである。(写真③③④)
スポーツと言うよりは散策に近い、のんびりしたトレッキングを、体験してみよう。



③九州オルレ「奥豊後コース」



④九州オルレ「別府コース」(志高湖)

四 やまなみハイウェイを巡る 各ブロックの「風景街道的」おすすめ

ここまでは、「九州横断の道 やまなみハイウェイ」の特徴を大枠として説明してきたが、以降では、実際にこのエリアを巡ることを想定し、エリアを四つのブロック（別府、湯布院、九重、竹田）に分け、それぞれのブロックについて少し詳しく紹介してみよう。（図⑤⑥⑦⑧）

ただし、何度も言うように、本風景街道の観光地としての魅力は全国的に見ても格別であり、観光情報は多くのメディアで紹介され、かつ旬の情報も含めて常に更新されている。それらに掲載されている内容をまた改めてここで紹介する必要もないだろう。

ここでは、風景をより味わうための調味料的な情報になることを期待して、「風景街道的視点」からのお勧めポイントを紹介してみたい。



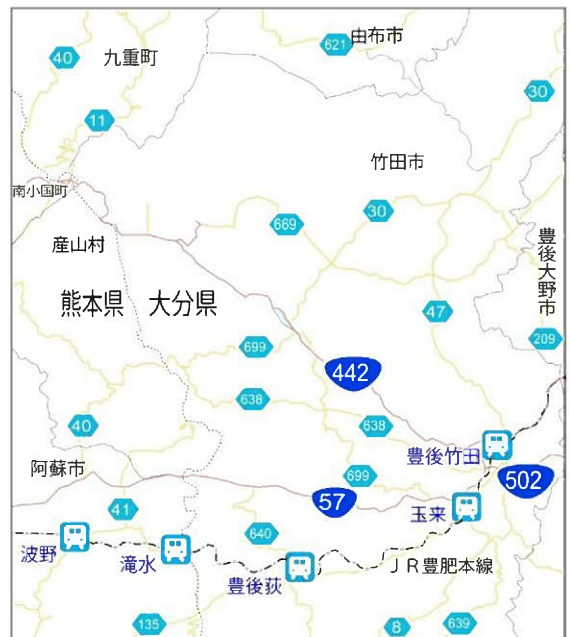
図⑤ 別府ブロック



図⑥ 湯布院ブロック



図⑦ 九重ブロック



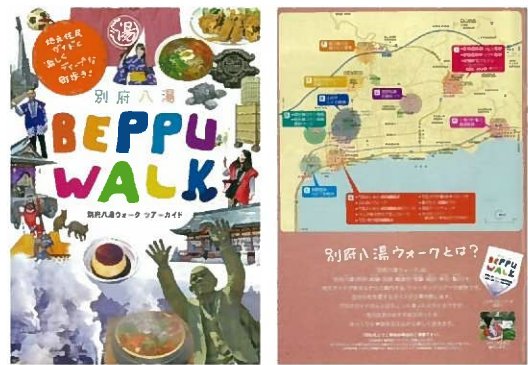
図⑧ 竹田ブロック

1. 別府ブロック

〈別府八湯ウォーク〉

「別府八湯ウォーク」は、別府八湯を地元のボランティアガイドが歩きながら案内する、ウォーキングツアーである。それぞれの温泉にはその地区特有の歴史や文化、まちなみや風景などがあり、それらをゆつくりと学び、楽しむことができる。地元が大好きな住民の方によるガイドなので、地元ならではのディープなおすすめスポットやウンチクを個性豊かな語り口とともに味わってみたい。

ツアーは二〇一八年（平成三〇年）四月現在、路地裏やまちなかの散歩や食べ歩き、あるいは夕暮れやの散策ツアーなど二〇種類もあり、多彩である。また、毎日実施されているものもあれば、週一回、月一〜二回程度のもので、あるいは不定期のものもある。日によって体験メニューが変わるので、何度訪れても新しい体験ができるだろう。観光案内所等で「別府八湯ウォーク ツアーガイド」のパンフレットを入手して、ご希望のツアーを探してみよう。（写真③⑤）



③⑤ 「別府八湯ウォーク ツアーガイド」パンフレット

〈国際都市・別府〉

別府のまちを歩くと、若い外国の方が多くことに気づくだろう。別府のまち近くの山の上にある立命館アジア太平洋大学（APU）の留学生達だ。世界の様々な国からの留学生三千名近くが在籍し、これは全学生の約半数にあたる。このおかげで別府市は、市の人口に占める留学生の割合がトップクラスとなっている。

さて、ここで APU に触れたのは他でもない。別府のまちづくりに留学生が大いに貢献しているからである。留学生が通訳や観光ガイドを務めることはもちろんのこと、市民と留学生が交流できるカフェや国際色豊かなゲストハウスを開いたり、あるいは新たなまちづくりの提案をしたりと、積極的にまちづく

りに関わっている。（写真③⑥）また、留学生が多いことで、イスラム教で食べることを許された食材（ハラル食品）だけを使った飲食店や、エスニックレストランなども増えてきた。（写真③⑦）

これらの結果、外国人観光客にとっても訪れやすく楽しみやすいまちになったため、外国人観光客も増加し、そして留学生だけでなく外国人の居住者の数も増え、国際ビジネスも増えるという好循環が生まれているようである。

まち巡りの際は、留学生や外国の方とのふれあいも楽しんでみよう。もちろん、外国からのお客さんを案内するとき、別府はお連れしやすい場所であることも強調しておきたい。



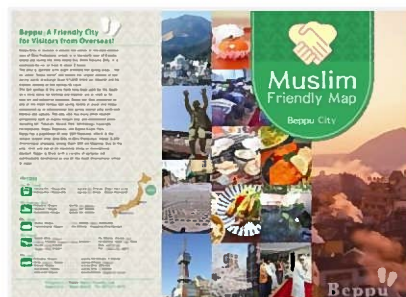
③⑥ 留学生ガイドまち歩き

2. 湯布院ブロック

〈由布院温泉まちづくり物語〉

由布院温泉は、今や多くの国内外からの観光客を集める全国屈指の保養温泉地である。実は由布院が温泉地として発展したのは比較的新しく、さらに今のような姿になるまでには紆余曲折の経緯がある。この経緯そのものが由布院の魅力あふれる有名なまちづくりの物語なのであり、ここで概略だけでも紹介しておきたい。

そもその由布院温泉の歴史は古く、約一三〇〇年前の奈良時代に編纂された豊後風土記の中にその名が見られる。鎌倉時代には、効用のある温泉として広く知られていたようであるが、江戸時代に入ると衰退し、地元の人のみが利



③⑦ 「ムスリム フレンドリー マップ」表紙

用する程度の温泉となっていた。

湯治場として再び活気を取り戻したのは、明治維新後であり、近くに陸軍の演習場ができ、軍人らが利用するようになってからである。大正時代には油屋熊八が別荘を建築し、「別府の奥座敷」として利用したが、利便性の低さもあって特段の発展を見せたわけでもない。逆説的であるが、発展しなかったことにより自然に囲まれた静かで田園的な環境が護られていた。

由布院温泉が現在に続くまちづくりの方向性が定まったのは、一九五五年(昭和三〇年)に由布院町と湯平村が合併し湯布院町となったときの初代町長岩男頼一氏の政策方針である。氏は、開発主導型・歓楽街型の観光振興を否定し、開発を抑制しながら「産業・温泉・自然の山野の三つの融合」を目指す、健全な保養温泉地づくりを掲げた。

以降、高度成長期を経てバブル経済期に至るまで、開発の波は由布院温泉に何度も押し寄せてきたが、ゴルフ場建設計画と大型観光ホテルの開発計画を拒否し、併せて開発や景観に関連する各種の条例を制定・補強し、現実的にも制度的にも開発抑制型のまちづくりが進められてきた。

由布院のまちづくりのもう一つの柱は「ブランド戦略」である。一九七六年(昭和五一年)に始まり今に続く「牛喰い絶叫大会」、「湯布院映画祭」、あるいは一九八六年(昭和六一年)に開館した「湯布院空想の森の美術館」(二〇〇一年に閉館)など、湯布院では手づくりで「何か楽しく文化的なことが起きる」というイメージを創り出し、国内に広めることに成功した。観光地のブランド戦略としては、早い時期に成功した一つのモデルだろう。

なお、これら開発抑制型のまちづくり、そして「ブランド戦略」をリードし、推進したのが、亀の井別荘・中谷健太郎氏、由布院玉の湯・溝口薫平氏、山のホテル夢想園・志手康二氏の三氏であることはあまりにも有名である。観光のあり方を考えるための欧州視察に始まり今の由布院に続くまちづくりの道のりは、様々な書籍や雑誌でも紹介されている。それは「進むべき目標に向かって闘いながら前に進む壮大な物語」である。

時間のあるときには是非、ゆっくりと彼らを中心としたまちづくりに関わる人々の物語に触れてみて欲しい。

あらためて、由布院の現在に目を向けてみよう。国内でも有数の温泉観光地としての地位を獲得し、湯の坪街道を中心としたまちなかには、観光客があふれている。特に最近では外国人観光客の増加も著しい。そして観光客を対象としたショップが軒を連ね、通りに人があふれており、ゆっくりと落ち着きのある風情が失われているとの声も聞こえる。(写真³⁸)

由布市としても、このあたりの危機感があり、「由布院盆地景観計画」「湯の坪街道周辺地区景観計画・景観協定」などを定め、官民一体となって良好な街の姿を維持することに努めている。たとえば、湯の坪街道沿いの店舗をよく見てみよう。建物の高さや屋根の形、素材や色彩、そして看板の大きさや数などに一定のルールがあることが見て取れるだろう。

そして是非、早朝の人通りの少ない時間にまちを歩いてみよう。まちなか本来の落ち着いた懐かしさのある風景を、由布岳の遠景と共に体験することができよう。

そして、由布院のまちづくりが本当に守りたかった農村の風景は、このまちなかの外側にある。まちなかから少し外側に足を運んでみよう。あるいは自転車や幹線道路から外れてみよう。山々に囲まれたごんまりとした盆地に、大きな人工物が視界に侵入することもなく、川のせせらぎとともに田畑の風景がそこに展開している。(写真³⁹)

由布院のまちは時代の変化にさらされながらも、どっしりと本質を守り続けている。



39 由布院農村風景



38 由布院湯の坪街道

3. 九重ブロック

九重ブロックの魅力は、本ガイドブック冒頭で書いたように、なんといっても雄大な自然風景であり、温泉であり、そして草地に代表される文化的景観でもある。それらは全国的に見てもまれもなく一級品で、毎年多くの観光客が訪れている。近年では、アジアからの観光客も急増している。

さらに、これらいわゆる生来の魅力に加え、観光客を楽しませる店舗・飲食店、各種アクティビティ・サービス（乗馬など）、宿泊施設・キャンプ場あるいは美術館等の文化施設等も多くあり、楽しみ方には事欠かない。訪れる人の多様な関心をすべてカバーするに十分である。

この意味で九重ブロックは「完成・洗練された観光地」となった。これらに関する観光関連情報については、各種観光情報誌、インターネットHP、各種SNSで様々に紹介されている。それらには、施設・サービスの移り変わりや、シーズンごとの旬の情報まで紹介されており、本ガイドブックが及ぶところは到底ない。

それでもなおここで紹介しておきたいものは、個別の観光資源というよりは周遊・観光をつなぐテーマという視点ということになるだろう。

〈九重夢温泉郷〉

九重町には、比較的小さなしかし個性的な温泉が散在しており、それらの総称が「九重夢温泉郷」である。主な温泉は「龍門温泉」「水分温泉」「壁湯温泉」「宝泉寺温泉」「川底温泉」「九水溪（きゅうすいけい）温泉」「釜ノ口（うけのくち）温泉」「馬子原（まごそ）温泉」「湯坪温泉」「筋湯温泉」「長者原温泉」「寒の地獄温泉」の一二箇所（もちろんこれら以外にも小さな温泉は多数存在する）。

たとえば壁湯温泉は川辺の岸壁をくりぬいたような天然の洞窟の露天風呂が名物で（写真④）、川底温泉は浴槽の底から湯が自噴している。筋湯温泉は歴史も古く「うたせ湯」が有名である（写真④）。そのほか、寒の地獄温泉は文字通り一三〜一四度の冷泉が湧き出ている。

九重夢温泉郷の温泉はそのほとんどに露天風呂があり、さらに「源泉かけながし」であることが多い。一つ一つの温泉は、温泉街というほど規模もなく、どちらかといえば地元の方々の方々の日常生活の場にお邪魔して、一緒に過ごしている感覚に近いだろう。

自然の風景を目にしたがら、場合によっては地元の方々との会話を楽しみながら、ゆったりと「新鮮な」湯を堪能できることは、なかなか贅沢な経験であろう。

なお、言うまでもないが、九重町外の近隣エリアにも多くの温泉がある。こちらも是非、探索されてみたい。



④ 壁湯温泉



④ 筋湯温泉

4. 竹田ブロック

竹田ブロックの魅力は「石の文化」と「歴史」に象徴でき、それらについては先に解説したとおりである。ここではそれとも関連しながらも少し違った視点から竹田の魅力を紹介したい。すなわち「名水の里」としての竹田である。

〔竹田湧水群〕

竹田市内には至る所に湧水地があり、清冽な水が豊富に山間の里を流れている。その数は約六〇か所ともされ、「竹田湧水群」として環境省の名水百選に選ばれている。(図⑧)「石の文化」「歴史」で紹介した「井路」「石橋」も、この水を台地に巡らせるもので、竹田の文化と歴史を「水」なしには語れない。

湧水群は阿蘇山系からの伏流水を水源とし、大野川水系の緒方川や玉来川の流域に点在する。湧水の総量は日量で六〇七万トンで、水質としてはカルシウム、ナトリウム、カリウム、マグネシウムをバランス良く含んでいる、さつぱりとした味わいの軟水。地元では古くから、飲用などの生活用水や灌漑用水として用いられてきたほか、近年ではエノハ(ヤマメ)などの淡水魚の養殖や、ミネラルウォーターとして販売もされている。もちろん、県内外からの水汲み客も多い。



図⑧ 竹田市 湧水地図

竹田湧水群の中でも、竹田市街地の南部近郊に集中する湧水群は「入田湧水群」と呼ばれ、市街地からの近さもあって、多くの来訪客に親しまれている。入田湧水群の代表的な湧水には、河宇田(かわうだ)湧水、泉水、泉水(せんずい)湧水、矢原(やばる)湧水、長小野湧水(鳴瀧(なるたき))、長小野湧水(塩井)がある。

入田湧水群そして竹田湧水群の中でも最も湧水量が多いのは、河宇田(かわうだ)湧水。(写真④②)遊水池は道路から少し入った場所にあり、小さな祠が祀られているが、水汲み場は道路沿いにしつかりと整備され、また駐車場やトイレ(障害者用あり)もあり、連日多くの水汲み客を集めている。また、湧水で養殖されたエノハを味わえる食事処もあり、さらには中島公園河川プールもあるので、家族連れの旅行にはとても利用しやすい。

また、長小野湧水(鳴瀧)は、岩から滝のように水が湧き出る珍しい湧き水で、この滝が鳴瀧神社のご神体とされている。緑の中の岩肌で清冽な水が流れるその光景はとても神秘的である。地元には不治の病が治るとされる伝承もあり、湧水が古くから地元の人にとって大切に守られてきたことがわかる。(写真④③)



④② 河宇田(かわうだ)湧水



④③ 長小野湧水(鳴瀧)

なお、以上の入田湧水群の他には、竹田市街地から北のくじゅう近辺に湧水が散在しており、代表的なものとしては、白水の滝の湧水、杵山(もみやま)湧水、くずろ谷湧水、小津留(おづる)湧水、老野(おいの)湧水、山の神湧水一番水がある。こちらは比較的小規模な遊水池水源としては広範囲に展開しているので、ドライブの途中に小休憩も兼ねて立ち寄ってみたい。(写真④④⑤⑥)

ところで、最近では湧水も「水汲みスポット」として多くの訪問客を集めるところが多く、また、それにつれて飲食・物販や観光系施設が立地する場合も多くなってきた。この意味で、湧水が観光資源であることは疑いもないが、一方で湧水は、古くから今に至るまで地元の方々の信仰の場、特別な場であったことは忘れてはならない。

水源には神社や小さな祠があり、また水源池や水路は地元の方々によってきれいに保たれている。また、今においてもなお、地元の方々の好意によって水汲みが無料の箇所も多い。訪れるものとしては、散らかさないことも含め、利用させていただくマナーについて尊重したいものである。



④⑤ 初山(もみやま)湧水



④④ 白水の滝



④⑦ 老野(おいの)湧水



④⑥ 小津留(おづる)湧水

五 道の駅、直売所等について

「九州横断の道 やまなみハイウェイ」のエリア内の道の駅は、表①に示すように「道の駅たけた」(写真④⑧-1)が、「道の駅ながゆ温泉」(写真④⑧-2)、「道の駅すごう」(写真④⑧-3)、そして「道の駅ゆふいん」(写真④⑧-4)の四つがある。いずれもレストランと直売所を備えており、ドライブの途中に立ち寄ってみたい。そして特徴的なのは「道の駅ながゆ温泉」で、その名の通り温泉施設が併設されている。温泉でさっぱりとして次の目的地に向かうのもよいだろう。

なお、民間拠点施設・直売施設は表②に示すように、エリア内に一五施設がある。こちらも新鮮な地元産品が入手できるので、立ち寄ってみたい。



④⑧-2 道の駅ながゆ温泉



④⑧-1 道の駅たけた



④⑧-4 道の駅ゆふいん



④⑧-3 道の駅すごう

表① 道の駅

道の駅たけた	国道442号	0974-66-3550	大分県竹田市米納663-1
○提供エリア及び提供時間 ○情報提供機器 ○情報提供内容		「物産情報館」内 10:00～17:00 情報端末 1台	ルート情報を地図・チラシで提供 駅周辺の観光、宿泊施設情報を掲示板、チラシで提供 医療情報を掲示板で提供 施設の内容を掲示板、チラシで提供 なし
道の駅ながゆ温泉	県道30号	0974-64-1400	大分県竹田市直入町大字長湯8043番地1
○提供エリア及び提供時間 ○情報提供機器 ○情報提供内容		おんせん市場 8.00～18.00 観光案内所 9.00～17.30 情報端末 1台	ルート情報を情報端末、掲示板で提供 駅周辺の観光施設情報を情報端末、掲示板で提供 医療情報を掲示板で提供 情報端末、掲示板で提供 災害情報を掲示板で提供
道の駅すごう	国道57号	0974-65-2211	大分県竹田市大字菅生989番地1
○提供エリア及び提供時間 ○情報提供機器 ○情報提供内容		9:00～17:30 情報端末 1台	ルート情報を地図・チラシで提供 駅周辺の観光、宿泊施設情報を掲示板、チラシで提供 医療情報を掲示板で提供 施設の内容を掲示板、チラシで提供 なし
道の駅ゆふいん	国道210号	0977-84-5551	大分県由布市湯布院町川北899-76
○提供エリア及び提供時間 ○情報提供機器 ○情報提供内容		「インフォメーションセンター」24時間利用可 情報端末 1台、大型画面 1台	ルート情報を案内人、情報端末、大型ディスプレイで提供 駅周辺の観光施設情報を案内人、情報端末で提供 記載なし 案内人が提供 災害情報を情報端末、大型ディスプレイで提供 気象情報を情報端末で提供 観光ビデオを大型ディスプレイで提供

表② 直売施設

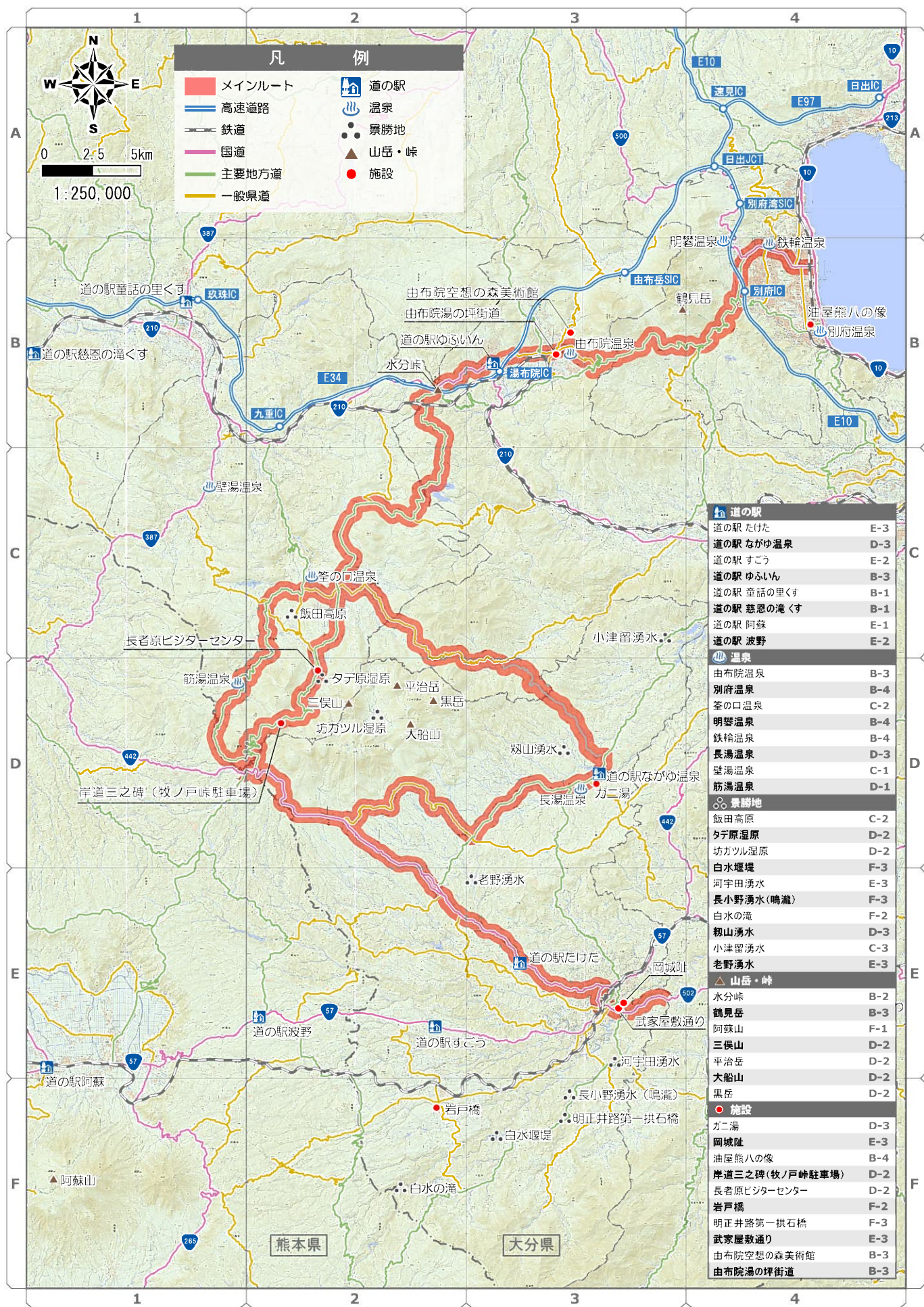
市町村	名称	電話	住所
別府市	里の駅かんなわ	0977-66-1233	別府市鉄輪北中1組
	ふれあい市場 旬の館朝日店	0977-66-8818	別府市大字鶴見635番地
	ふれあい市場 旬の館石垣店	0977-85-8757	別府市石垣東9-1-26
由布市	いこいの店 しろやま	097-582-0468	由布市庄内町龍原193-3
	陣屋市場	097-583-4312	由布市挾間町挾間106番地7
	湯だまり	0977-84-2270	由布市湯布院町川上2914-1
九重町	九重夢大吊橋物産直売所	0973-79-3305	九重町大字田野1208
	飯田高原ドライブイン	0973-79-3123	九重町大字田野1733-4
	里の駅 九重ふるさと館	0973-73-4008	九重町右田1918-14
	宝泉寺温泉観光物産館 宝泉寺駅	0973-73-6100	九重町菅原1850-19
竹田市	グリーンピア天神	0974-64-0222	竹田市大字飛田川1618-8
	グリーンピア七里	0974-62-4011	竹田市大字会々1650番地
	高原の店 とまとちゃん	0974-68-3518	竹田市恵良原776-1
	グリーンピアサンリブ	0974-63-1966	竹田市玉来710サンリブ内
	農産物直売所「まきば」	0974-76-2282	竹田市久住町久住3987
水の駅おづる	0974-64-7277	竹田市直入町下田北1319-1	

六 観光案内所など

道の駅に行けば、各種の旬の観光情報やリアルタイムの交通情報が入手できるが、その他にも地区ごとに観光案内所がある(表③)。ちなみに表内には外国語への対応状況も示しているので、海外客を案内される時の参考にして欲しい。また、案内所の中にはフェイスブックを開設しているところもあるので、興味があれば検索されたい。

表③ 観光案内所

市町村	名称	電話	住所	HP多言語対応
別府市	別府駅案内所	0977-24-2838	別府市別府市駅前町12-13 JR別府駅構内	-
	別府市観光協会事務局	0977-24-2828	別府市上野口町1番15号 別府市役所1階	英, 韓, 繁, 簡
由布市	湯布院塚原高原観光協会	0977-85-2254	由布市湯布院町塚原4-31	英
	由布市ツーリストインフォメーションセンター	0977-84-2446	由布市湯布院町川北8-5	-
	湯平温泉観光案内所	0977-86-2367	由布市湯布院町湯平356-1	-
九重町	九重町観光協会	0973-73-5505	九重町右田714-28(JR豊後中村駅構内)	-
	九重“夢”大吊橋管理センター	0973-73-3800	九重町大字田野1208	英, 韓, 繁, 簡
	くじゅう飯田高原観光案内所	0973-79-2381	九重町田野260-2	-
竹田市	久住高原観光案内所	0974-76-1610	竹田市久住町大字久住3987	-
	竹田観光案内所	0974-63-2638	竹田市大字会々2335-1(JR豊後竹田駅構内)	-
	竹田市観光ツーリズム協会	0974-63-0585	竹田市大字会々2250-1	英

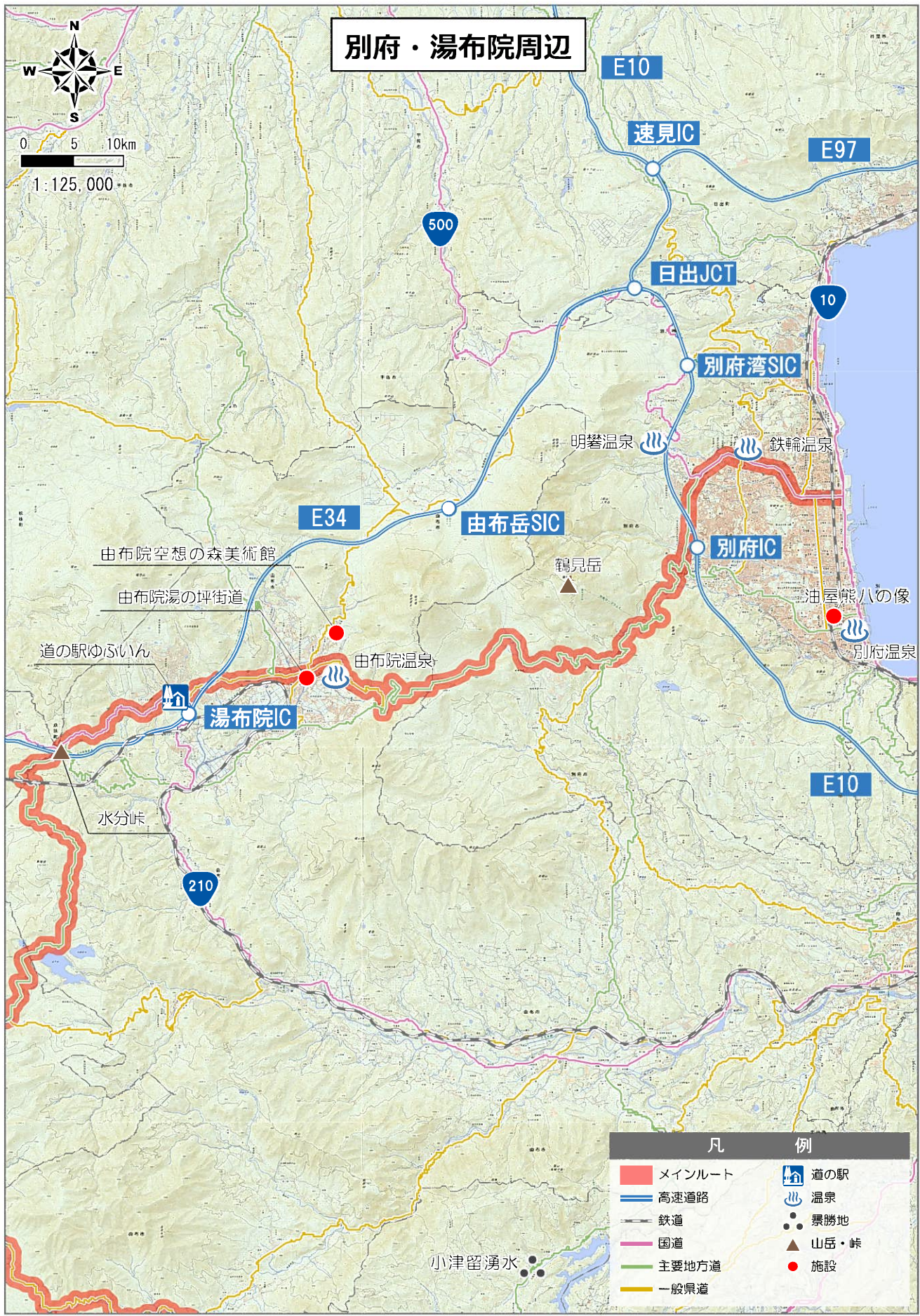


凡 例

—	メインルート		道の駅
—	高速道路		温泉
	鉄道		景勝地
—	国道		山岳・峠
—	主要地方道		施設
—	一般県道		

道の駅	
道の駅 たけた	E-3
道の駅 ながゆ温泉	D-3
道の駅 すこう	E-2
道の駅 ゆふいん	B-3
道の駅 童話の里くす	B-1
道の駅 慈恩の滝くす	B-1
道の駅 阿蘇	E-1
道の駅 波野	E-2
温泉	
由布院温泉	B-3
別府温泉	B-4
釜の口温泉	C-2
明礬温泉	B-4
鉄輪温泉	B-4
長湯温泉	D-3
壁湯温泉	C-1
筋湯温泉	D-1
景勝地	
飯田高原	C-2
タデ原湿原	D-2
坊カツル湿原	D-2
白水堰堤	F-3
河宇田湧水	E-3
長小野湧水(鳴瀧)	F-3
白水の滝	F-2
粗山湧水	D-3
小津留湧水	C-3
老野湧水	E-3
山岳・峠	
水分峠	B-2
鶴見岳	B-3
阿蘇山	F-1
三俣山	D-2
平治岳	D-2
大船山	D-2
黒岳	D-2
施設	
ガニ湯	D-3
岡城趾	E-3
油屋熊八の像	B-4
岸道三之碑(牧ノ戸峠駐車場)	D-2
長者原ビジターセンター	D-2
岩戸橋	F-2
明正井路第一拱石橋	F-3
武家屋敷通り	E-3
由布院空想の森美術館	B-3
由布院湯の坪街道	B-3

別府・湯布院周辺

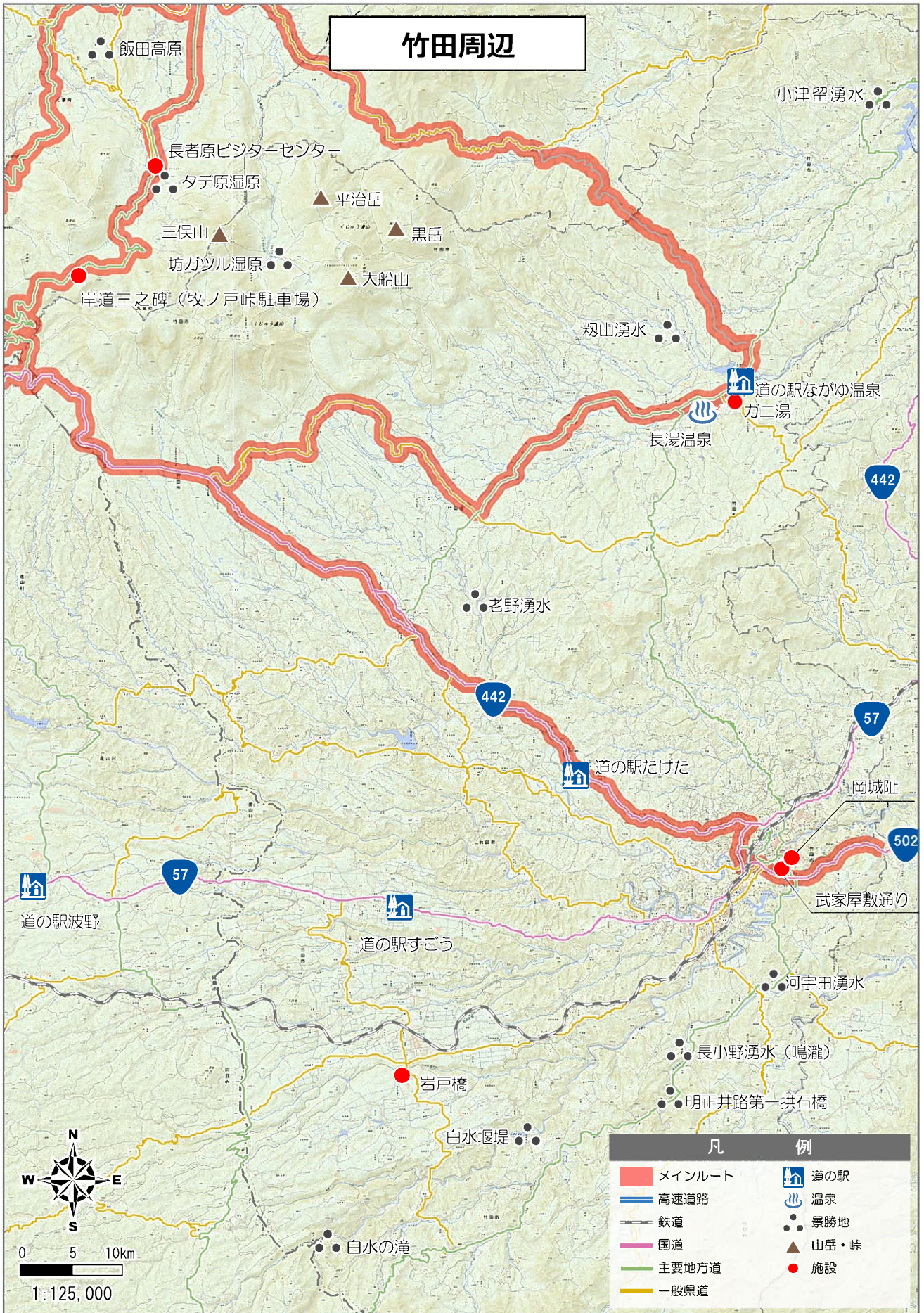


凡 例	
—	メインルート
—	高速道路
—	鉄道
—	国道
—	主要地方道
—	一般県道
	道の駅
	温泉
	景勝地
	山岳・峠
	施設

九重周辺



竹田周辺





九州風景街道ガイドブック

人のくに、美のくに九州 Q-8 九州横断の道 やまなみハイウェイ

平成 31 年 3 月 31 日 初版第 1 刷発行

著者 ルートガイド編纂委員会：樗木武、堤昌文、玉川孝道、吉武哲信、榎谷秀秋
九州横断の道 やまなみハイウェイ担当（文責）：吉武哲信

発行 九州風景街道推進会議
事務局（九州地方整備局道路計画第二課内）

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。